
東方大妖精

人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方大妖精

【NZコード】

N9114P

【作者名】

人

【あらすじ】

チルノのことが大好きな大ちゃんががんばるお話。

第一話 私は大ちゃん（前書き）

こんにちは、人です。

今作は見切り発車となつております。

ですので大変ごちやごちやとしたものになつております。

ご都合主義に独自解釈・設定などなんでもござれ、です。

内容を書きながら考えておりますので、更新速度は期待できないで

す。

さらに、あらすじほどシリアスじゃないです。

それでは、どうぞ。

ああ、言い忘れていましたが、大チルは俺のアイシクルフォール。
あとルーミア大好き。美鈴最高。

第一話 私は大ちゃん

深く暗い青色の広大な湖。その上に垂れ幕の様に覆いかぶさっている薄い霧。

空に広がるのは、じこまでも続く明るい青。そこに霧以外に白色は混じらない。

天上にはさんさんと太陽が照つており、その日差しは暖かく心地いい。

時折霧に反射して、虹色に光ることもある。それを見たものは、幸せになれるなんて噂もあるくらいだ。

ここは、幻想郷の霧の湖と呼ばれている場所。

額に手をかざして太陽光をさえぎり、辺りを見回す。多分、こっちの方に行つたと思うのだけれど。

いつも私はこの湖で友達と遊んでいる。今日も、いつもと同じように友達と遊んでいたのだけれど、その友達は、にじがみえた！何て言って、こっちの方に飛んで行つてしまつた。

「まつたくもう…追いかけっこするつて言つたのはチルノちゃんなのに」

そんな風に悪態をついてみるけど、本当に悪く思つたりはしていない。私の友達のチルノちゃんは、興味の対象がこじろこじろとすぐに変わつてしまつたのだ。長い付き合いでから、今はもう気にしない。

「チールーノーちゃん！」

手を筒状にして口にあてて、大きな声でチルノちゃんを呼ぶ。

湖の奥のほうまで声は響いていったけれど、チルノちゃんの返事は無かった。

変わりに、この湖にいる妖精たちが顔をのぞかせた。

そう、妖精。私も、友達のチルノちゃんも。その証拠に、私の背には羽がある。

縁のついた透き通るような羽。私の少ない自慢のひとつ。

「ねえ、チルノちゃん見なかつた？」

近くにいた妖精に声をかける。その妖精は、何も言わずに私が向かつて行こうとしていた方にひとさしゅびを向けた。

ありがとうとお礼を言って、その方向に飛んでいく。

私の緑色の髪が横から吹いてきた強い風になびいて、顔にかかつた。かかつた部分は、ちょうど私が左の頭のほうで結んでいた髪だった。そういえば一度だけ右側で結んだことがあつたけれど、あの時はチルノちゃんに「誰?」って言われて慌てたなあ。

昔の懐かしい記憶を思い出しながら、顔にかかつた髪の毛を払う。

それから、少しスピードを上げた。

しばらく進んでいくと、見覚えのある背中を見つけた。青い髪に、後ろ頭で結ばれた大きな青いリボン。青いワンピースに、氷で出来た羽。

「チルノちゃんつ」

キツと急ブレーキをかけて、チルノちゃんの横に止まる。チルノちゃんは左手を右の肘に当たて、右手をあごに添えてなにやら神妙な顔つきで俯いていた。

が、すぐ私に気がついて、顔を上げる。

「お、大ちゃん。どしたの」

あう、やつぱり。がつくりと肩を落とす。私のこと、忘れてたのね。ちなみに大ちゃんつて言つのはチルノちゃんがつけてくれた私の愛称。

他の妖精とかには、大妖精つて呼ばれている。

「ど「したの?」じゃないよ、チルノちゃん。なんで一人で先行つちやつの」

確かにチルノちゃんは興味の移り変わりが激しいけれど、私といたことを忘れるなんてあんまり無いのに。

忘れられていたことにちょっと怒つて、ふんふんしながらチルノちゃんに言つ。

チルノちゃんはあ「から手を離して腕を組んで、大きく首をかしげた。

「あたいはずつと」「こいつたけど?」

うわ、とほつペを膨らませて言つ。だつて、チルノちゃんが同じ場所に長くいるなんておかしいもの。槍が降つてきちゃうよ。するとチルノちゃんは、斜め上空に向かつて人差し指を立てた手を

伸ばした。

「あたいね、あれみてたのよ」

あれ？ あれって、なあに？

チルノちゃんの指差す方向に田に向けてみるものの、そこには青空が広がっているだけだった。

何も無いよ、と言葉には出さない、表情で訴えるべくチルノちゃんのまうを見た。

チルノちゃんもこちらを見てきて、うむ、と頷く。わあ、私の意志がぜんぜん伝わってないや。

「でつかいにじ」

虹？ それって、あの見たら幸せになれるっていう？ あつたかな、と再び指がさされている方向を見る。……あーあつたー薄くて大きくて、見えにくいけれど、『虹があるのかな』って思つてみてみれば、確かに見える。

「きれい……」

ほう、と胸元で両手を合わせて、息を吐き出す。隣ではチルノちゃんが目をつぶって、うむうむ、と意味ありげに頷いていた。…あれ？ でもなんで、あの虹は霧の中じやなくて空にあるんだろ？

「やっぱ、サイキョーのあたいね。幸せの虹を見つけるなんて

そつ思つていると、チルノちゃんが得意げに言つた。
くすり、と思わず笑みをこぼした。いつも通りだ、ああやつて自分に感心したりするのも。

そこが、チルノちゃんの魅力のひとつでもあるのだけれど。

私は、あんまり自分を褒めたり出来ないから、余計チルノちゃんのそういうところが際立つているように感じてしまつ。ちょっとひつひつやましにいつていうかな、素直な感じとか。

そんなことを思いながら見ていると、すでに一十四回を越えるつむを言い終わつたチルノちゃんが突然顔を上げて、ぽんーと手を打つた。

「ひじといえればもんばんじやないー…わつわくこくわよ大ちゃん…！」

え？え？と、虹色の弾幕を放つから美鈴さんなの？ってああ、速いよチルノちゃん！おいてかないでよー！

あわてて私は、もう遠くに見えるチルノちゃんの背を追つて飛んだ。

何とかチルノちゃんに追いつく。小さく息を吐きながら、スピードを落とした。

私がそばに行つても、チルノちゃんは前を見たままだつた。もう、少しくらい声をかけてくれたりしてもいいのに。ちょっとさびしくなつて、もうひとつため息をついた。

ふと、視界の端にバタバタとスカートがはためいているのが見えた。そちらに目を向けると……ああー見えそう！見えそうだよチルノちゃん！！

「…ん？どしたの大ちゃん。顔が赤いよ？」

「ななな、なんでもないよー…」つん！なんでもないなんでもない…」

ばたばたわたわたと両腕を大きく振つて否定する。ほ、ほんとになんでもないんだってば！

そんなに見られると、恥ずかしいよ…。

両手で顔を覆つてなんでもない、落ち着けわたしーとぶつぶつ言つていると、チルノちゃんが「おっ」と声を上げた。

顔から手を離して、顔を上げると、ちょうど向こうから黄色っぽい金髪の髪の女の娘が飛んでくるのが見えた。

「よっ。ルーミア」

ゆっくりと速度を緩めて止まつたチルノちゃんが、片手を挙げて挨拶をする。

私たちの前まで来て止まつたルーミアさんは、同じように手を上げて答える。

それから、ひきしに身体を向けてきて、

「ほんにちわー、大ちゃん」

「ほんにちわー、ルーミアさん」

両手を身体の前で合わせて、ペーりとお辞儀をする。

ルーミアさんは、短いその黄色の髪をわしゃわしゃと搔きながら、困つたような顔で、そんなに畏まらなくともいいのに、と言つた。この人は、ルーミアさん。私たちと違つて力のある妖怪だ。見た目は可愛らしいけれど、人里の人間に恐れられている。ルーミアさんが言つには、人を食べていたのはもうずっと昔の話、らしい。ただ恐れられているなんて言つても、ルーミアさんは優しいから、

外から迷い込んできた人間の道案内をしてあげたりしている。容姿がこうだから、外から来る人はルーミアさんを恐れたりはしないんだって。

金髪のショートボブに、左側頭部に結ばれた赤いリボン。真っ白な襟と長袖に、黒い洋服。スカートはロング。胸元に、ネクタイのよう赤いリボンがたれている。

私よりも少し身長は低いけれど、時々大人っぽい仕草をする時がある、ともするとドキッとしてしまうこともある。

「こおまかんからきたみたいだな」

チルノちゃんがそう言った。こくりと頷くルーミアさん。片手で額にかかる髪を耳にかける仕草と、眠たそうに少しまぶたが下がっている目が、なんだか不思議な雰囲気を醸し出している。

ルーミアさんは、ゆっくりと瞬きをしてから、私たちの笑顔とは違う、口の端を少し上げるだけの笑顔になつて、口を開いた。

「美鈴とちょっと遊んできた」

「またこてんぱん？」

「うん、こてんぱんよ」

にこりと、紅い目を細めて笑う。その首を数ミリほど傾けて、

「わたしがね」

ニカツとチルノちゃんも笑つた。二ヒルな笑みつていうのかな、それとも、ワイルドっていうのかな。

そんな風に笑うチルノちゃんの顔は、すごく格好良かつた。

ふわふわと移動して、私たちが今来た道をゆっくり移動していくルーミアさん。

チルノちゃんは、ルーミアさんを見て、紅魔館の方を見て、それから、ルーミアさんの隣に飛んでいった。そうすると思っていたので、ぴつたりとくっついていく。

「これからどういくんだ？」

ルーミアさんに並飛行しながらチルノちゃんが聞いた。

うん、と呟くルーミアさん。私はチルノちゃんを挟んで飛んで、ルーミアさんの言葉を待っていた。

「リグルん家にね。そこにミステイアもいるだらうし」

ほつ、とチルノちゃんが呟いた。私は、じゃあ森の方に行くんだ、久しぶりだな、リグルちゃんたちに会つの、と思っていた。

しばらくは無言で飛んだ。数分ほどそうしていると、湖の終わりが近づいてくる。その先に広がるのは、深い緑の森。

私たちよりも頭ひとつぶん先に進んでいたルーミアさんが降下し始めたのにあわせて、チルノちゃん、私と続いて地に降り立った。ここから歩きで森へと入つていく。

私は詳しいことは知らないのだけれど、この森には歩いていかないと入れない、らしい。

進んでいけば、頭上は木々に生い茂る葉に覆われて、足元には太い根っこが露出し始める。

ひょいひょいとそれをまたいで私たちは奥へと進んでいく。所々に差し込む日の光に、森に満ちる生き物たちの声、湿気に反射する太陽光。目を癒してくれる緑たち。

思わず手を組めて胸に手を置いて、体中でそれを感じていたくなつてしまつ。

それほどまでも「こはれい」で、それでいて穏やかだつた。

「こは、魔法の森と呼ばれる森。多湿の森で、夏に来るといひどく蒸し暑くなる場所。

「こはの奥地にリグルちゃんの家があるのだけれど、ナリココへまではいろいろと苦労があつたりする。

確かに「こは」は穏やかできれいに感じるので、実は「こは」は危険な妖怪たちがたくさんいるのだ。

妖怪って言つのは、なにもルーニアさんの様にみんながみんな優しいつてわけじやなくて、人間でも、妖怪でも見境なく襲つて食べてしまつたりするものもいる。そのなかに、妖精だつて含まれてしまつ。

故にあまり心休まる場所じゃないんだけど、それでも「こは」で静かに歩いてこると、じつしても穏やかな気持ちになつてしまつといつが…。

遠くから、森を流れる川のせせらぎが聞こえてきた。思わずそちらに顔を向けて歩いてこると、木の根に足を取られた。

「あやつ…。」

たおれる…。そつ思つたとたんに、ふわりと抱きとめられた。「のらんやりとした感触は…。

「まえみてあるかないとダメだぞ、大ちゃん」

顔が赤くなつていぐのを感じた。なんだらう、すく恥ずかしくて、今すぐでも駆けて行きたいなんて衝動に駆られる。

それ有何とか押し込めて、俯きながらチルノちゃんの肩に手を置いて、体勢を立て直した。チルノちゃんが顔を覗き込んでくるものだから、あわてて離れる。

「またかおがあかくなつてゐる。かぜか？大ちゃん」

「ううん！？だ、大丈夫だよ！？風邪じゃないよ！？」

ぶんぶんと手を振つて否定する。

あうう、チルノちゃんにいらない心配をさせてしまった。わたしの馬鹿…。

頭を抱えて自己嫌悪に落ちてこると、ぱっと、手をとられた。

「…」

短くそりそりと、私の手を握つたまま、向ひつてこちらに体を向けて立ち止まっているルーミアさんのもとへと駆け出すチルノちゃん。私は引っ張られて、何とか転ばないように駆けながらも、握られた手の冷たさに、それなのに暖かくなる心に、顔を赤くして俯くのであつた。

第一話 私は大ちゃん（後書き）

描写を細かく書く練習も兼ねております。
感想をくれると大変喜びます。しかしむやみにやると調子にのりま
す

第一話 あたいゆめのなかのチルノ（前書き）

ひどいもんを（ストーリー構成的な意味で）。

第一話 あたいゆめのなかのチルノ

雷鳴が轟く真っ黒な雲が空を覆つていて、鼓膜を打つような轟音とともに幾筋もの雷があちこちで地へと落ちていく。

轟々と風が流れて湖は荒れて、高い波が嵐の海のよじにねりつている。

ついには雨まで降り始め。まるでこの世の終わりともいわんや光景の中に、一人。

薄水色の髪に、青い大きなリボン。氷の羽に、白いシャツの上から着ている青のワンピース。

ふと、その少女が振り向いた。豪風をものともせずに浮きながら、強い意志の光がともつた青い瞳でこちらを見据えてきた。キリリと締まつた眉をさらに寄せて、固く閉じられていた口を、ゆっくりと開いた。

『大ちゃんは、あたいがまもるから』

『おー、と強風が襲つてきた。顔を守るためにかざした手を見てようやく、私は自分が誰なのかを知つた。ボンッ！と雲を突き抜けて、雷を纏つた何かが私を見据える少女へと襲い掛かった。

『チルノちゃんっ！』

思わず、叫んだ。

しかし、私の声を受けてもチルノちゃんは動かなかつた。雷を纏つた何かがチルノちゃんへと肉薄した刹那、ようやくとつた風に緩慢な動作で腕を上げる

瞬間、どおん！と、まるで勢いよく壁にぶつかつたような音がして、

チルノちゃんを中心にして爆風が吹き荒れた。

スカートと髪の毛を押さえて、片方の目をつぶりながらも、何とか

チルノちゃんの姿を目に入れ続ける。

チルノちゃんの後ろに、まるで顎を殴り上げられたかのような体勢で止まる少女がいた。

薄クリーム色の、短髪。その髪の合間に、短い角が見えた。

くるん、チルノちゃんが少女のほうへと振り向く。そのまま自然な動作で、少女の腹へと膝を叩き込んだ。

ドゴオ！…と、人を蹴ったとは思えない重すぎる音が響く。

くの字に身体を折った少女の顔はしかし、とても楽しそうだった。その少女へと、両手を組んで振り上げていた腕を、チルノちゃんはためらいなく振り下ろした。

重い音と、衝撃波。

勢いよく荒れた湖面に叩き付けられた少女は、高い高い水柱を上げて、そして一度と上がつてくることはなかつた。

ザアザアと降りしきる雨に打たれながら、チルノちゃんへと顔を向ける。こんなにも激しく雨が降っているというのに、チルノちゃんは濡れていなかつた。

私がチルノちゃんの下へと飛んで行こうとした時、遥かかなたの方でぴかりと光るものがあつた。

それは、数秒もせずに太い光線となつて押し迫ってきた。

紅魔館をも飲み込んでしまえそうなその黄色い光線は、あの魔法使いの人が使うものにひどく似ていた。

『うがあああ…』

気合の声が響く。両手に握りこぶしを作つて、中腰で叫ぶチルノちゃん。その身体から、ボシュウーと光が炎のように噴出して、纏わりついた。迫る光線に構えるその身体には、青い光がバチバチと音を立てて帶電していた。

『ゼリああああああああッ！！！』

ブン、と、チルノちゃんが右腕を斜めに振り上げる。

振り上げられた腕は、チルノちゃんの目と鼻の先にまで迫っていた光線にぶち当たって、光の粉を撒き散らす。

一際強くチルノちゃんの身体から噴出する光が大きくなつた。帶電する光が、目に見えて増えていく。

大きな太鼓を叩くような音。そして、明後日の方向へと伸びてゆく光線。

まばゆい光が、あたりを照らしている。不思議と眩しくはなかつた。光線は暗黒の雲へと突つ込んでいき、大きく円を描くように霧散させた。

一部分だけ、光が差し込む場所ができた。といつても、その大きさは想像を絶するものだつた。

キッ！と音を立てるようにして、光線が飛んできた方向をにらみつけるチルノちゃん。その背にある透明の羽が、太陽の光に当たつて、場違いに思えるほどきれいだつた。

いつの間にか、チルノちゃんの前に一人の女性が立つていた。

癖のある緑色の短い髪の毛、鋭い眼光にともるのは赤い光、にやりと口角を吊り上げて笑う表情は、一見やさしそうに見えたが、しかし恐ろしくも見えた。その手には、不思議な傘。

白いカツターシャツに、チエックの入つたロングスカート。大きな胸の元に黄色いリボンがたれていて、羽織つたチエック柄のベストと一緒に激しくはためいていた。しかし何故か、長いスカートはそよ風にでも揺らされているのかと思えるくらいにしか動いていなかつた。

『大ちゃんにはゆびいっぽんふれさせない』

風見幽香と呼ばれるその妖怪を厳しい表情で睨み付けながら、チルノちゃんが言った。

その言葉に、とてもうれしくなってしまった。

口元に手を当てる、くすくすと風見幽香が笑った。それから、後ろに回して両手を解いて、傘を武器に見立てるようにして構えて、表情を恐ろしく歪めて言った。

『フフ…。今度は、そういうまくいくかしらね？』

瞬きをした後には、一人はすでに息がかかるほど距離まで近づいていた。

そして、ただ近づくだけではなかつた。風を裂いてしなる強烈な蹴りを、チルノちゃんは片腕で防いだ。

その重さに、ぐらりとチルノちゃんの体が傾く。先ほどとは違つた、焦つてている様な、厳しい表情。

反撃に、殴り返す。

凄まじい音と、衝撃波があたりを襲う。そこからはもう、私の目には見えなかつた。

重い音。風を裂く音。轟々と、天候とは関係のない強風。

私には、そこから飛ばされないようにすることだけで手一杯だつた。うすく細めた視界には、あちこちで現れては消え、激しい攻防を繰り返す二人の姿。

急に、その二人を中心とした強い光があたりを照らした。

と思つたら、弾かれる様に風見幽香が吹き飛んでいく。

さつきまで一人がいた場所には、衣服がボロボロになつたチルノちゃんが歯を剥き出しにして息を荒げて浮いていた。右肩は袖が無くなつていて、肩から血が流れている。左手でそれを庇う様にして、チルノちゃんは浮き上がりつてくる風見幽香を睨み付けていた。

あまりのそういうに、思わず口元を手で覆う。でも、目をそらしたくなかった。そうしてしまつと、チルノちゃんに申し訳なく思える

気がして。

風見幽香は、最初の余裕などかけらもない、それだけで殺せそうなほどの形相でチルノちゃんと対峙する。その手には、傘はもう握られていなかった。

今度は、すぐに距離を詰めたりはしないとした。

『その有様で、まだ守るとかこう気がしない?』

ブン、と顔を振った風見幽香が、嘲笑を含めてそういった。チルノちゃんは苦しげに息を荒げて、睨め付け続ける。かみ締めた歯の間から、搾り出すように息を吐き出して、吸い込むと同時に口を開いた。

『あたいはあきらめない。たとえしんだって。まもると、きめたか』

ブウ……ン。

チルノちゃんを中心にして、黄色の光の球ができる。表面が安定していないくて、時々揺らめくそれは、チルノちゃんの力の塊だった。すっと、指を力なく折った、開かれた手を重々しく上げるチルノちゃん。上げた右腕を、呼吸に合わせてゆっくりと腰に持つてこき、下へと向ける奇妙な構えを取った。

『馬鹿ね。そんな抵抗さえしなければ一瞬で楽にしてあげたのに。いいわ、全力で消し飛ばしてあげる』

完全に余裕を取り戻した風見幽香が、両手を合わせるように近づけて、しかし合わさずに前へと突き出した。それを、チルノちゃんと同じように、腰だめに持つていく。

チルノちゃんとは違つて、両手で。

私は、気が気じやなかつた。チルノちゃんが傷ついているといつの
も理由のひとつではあつたが、それだけではない。このままじや
。。

風見幽香を中心として出来た黄色い光を見て、確信した。
あれは、チルノちゃんの力よりもでかい、と。それぐらい、私にだ
つてわかつた。

『くたばれええええええええ！』

傷ついているチルノちゃんよりも、風見幽香のほうが力を溜めるのは早かつた。

光線がのひた

そことするほど明るい光を放つそれは、本當はすこし速度でチルノちゃんへと迫つてゐるのだろうけれど、何故かゆつくりに見えた。迫る風圧に、チルノちゃんの残つてゐる衣服が激しくはためいた。今度は、さつき見たいにははじけない。

あたるかどうかといったときに、チルノちゃんが右腕を突き出した。目と鼻の先で、光線が押しとじめられる。

にやにやと、風見幽香が笑っていた。わざとだ、長くチルノちゃんを苦しめようとしていた。

うとしている自分が。
思わず飛び出していた
詰せなかつた
こんなときはあるで
悩えよ

『アーティスの魔術……！』

目を見開いて、歯を食いしばって、力いっぱい光線に右腕を押し付けるチルノちゃん。

つらそうだった。私なんかよりも、ずっと。

『チルノちゃんあああああん！…』

どんーと、その身体に抱きつぶよにして押しとばす。驚くほど軽い手でたえとともに吹き飛んで行つたチルノちゃんは、啞然としていた。まるで、田の前のことが信じられない、なんていった風に。

『なつー！？』

ゆつくいと動く世界で、何故か焦つたよつて叫ぶ風見幽香の声が聞こえた。

ごめんね、チルノちゃん。私、やつぱり…。

最後まで考えることも出来ず、私は飲み込まれた。

遠くから、声が聞こえてきた。

『まもるつて……！－いつたのに、あたいはつ－－－』

チルノちゃんの声だつた。大丈夫だよ、チルノちゃん。私は、なんともないから。

……あれ、身体が動かないや。なんだか、胸から下が無くなつちやつたみたいに、何にも感じない。

どうしてかな。田を開いてるはずなのに、すゞく暗い。……うつと、でも、チルノちゃんの顔が見える。

震んでるけれど。

ぼろぼろと涙を零すチルノちゃんに、大丈夫だよって言つて安心させてあげたかつたけれど、口が動かなかつた。手を伸ばして、ほほを撫でてあげたいのに。涙を、すくつてあげたいのに。

チルノちゃんの涙が顔に落ちてくる。何粒も何粒も落ちてきて、まるで私が涙を流しているみたいに伝い落ちて行く。チルノちゃんの涙は、とても熱かつた。

『ああああああああああああああああああ』

長く、長く、上を向いてチルノちゃんが叫び始めた。

悲しそうしかこもつていなくて、どうにかしてあげたくて、でもどうにも出来なくて。

ぼろぼろと零れ落ちる涙が、チルノちゃんの身体から発生している小さなスパークにあたつて、はじけた。

近くに、風見幽香が降りてきた。

『予想外だつたけれど、生きていれば差し支えはなさそうね』

そんな。よくのわからない事を言つて、一歩一歩歩いてくる。まるで、チルノちゃんの声が聞こえていないようだつた。

バチバチと、チルノちゃんの身体から発生するスパークが強くなつていつた。

ぐぐぐ…、と、まるで魔法のように、私の好きなチルノちゃんの髪の毛が伸びて行く。

風見幽香の足が、止まつた。

『…どひ、うして…へどうじて！？貴女のどじにそんな力がつ！

？』

心底驚いていたが、若干の恐怖が混じつたような声。

チルノちゃんは、もう叫んでいなかつた。すつと立ち上がり、顔だけを風見幽香へと向けて、屹立する。

ふくらはぎ程まで伸びた薄水色の髪が、帶電しながらひとつ纏まりに風になびいていた。

『あ……ああ、あ』

愕然とした声、表情。一步、後ずさる音が聞こえた。

依然変わらず、チルノちゃんは鋭い眼光を風見幽香に叩きつける。

一步、チルノちゃんが踏み込めば、風見幽香が下がる。完全に、怯えていた。

『おまえはもう……あやまつてもゆるわないぞ』

チルノちゃんが消えて、何かが爆発するような音と、引き攣れた悲鳴のようなものが聞こえてきて、そこまでだった。もう何も考えられなくなつて、目を閉じた。それから、ゆっくりと意識が遠ざかつて……。

「お、おきたか大ちゃん」

よく知つた声で、私は目を開いた。何か、柔らかいもの、布団だろうか……それに身体を横たえていたようで、私の顔を覗き込むように、チルノちゃんが覆いかぶさつてきていた。驚きや、恥ずかしさなんかよりも、安堵が大きかった。

「チルノちゃんつ！」

「ねむー、へ、べ、べーしたんだつー？」

がばつと、抱きついた。チルノちゃんチルノちゃんチルノちゃん！とほお擦りをする。なりふりかまつていられなかつた。

とにかく嬉しくて、ぎゅうと抱きつく。チルノちゃんはわたわたと腕を振り回して、困惑していた。

冷たさ。

柔らかい肌か 硬い羽か 何もかもか
とにかく、今は抱きついていたいと、力いっぱいに抱きついていた

ガチャリと、ドアが開く音が聞こえてきた。

「どう チルノー? 大ちゃん 起きたー?」

入ってきたのは、この家の主だった。

「おおっ！ リグル！ たすけてくれ！ 大ちゃんがこわれたっ！」

チルノちゃんが大慌てで助けを求める。壊れたなんて、ちよつとひどい。

パタン。

なんだか妙なことを口走つて、リグルちゃんは行つてしまつた。
いや、今はそんなことはどうでもいいの。上じがどこなのかとか、
関係ないの。

「チルノちゃんチルノちゃんチルノちゃんっーー！」
「のああああああああああああああああああーー？」

そうして私は、正氣を取り戻すまでチルノちゃんの胸にほお擦りしていた。

気がついたときには、チルノちゃんは真っ白になつていて、ドアから覗いていたリグルちゃんとミスティアさんの視線が痛かつた……。そばによつてきたルーニアさんが私の肩に手を置いて、妙に無邪気そうな顔で、

「ふふちやはしぬのかー？」

なんて、本当に何を言つているのかわからない事を、へんてこな口調で言つて、相思相愛なのかそーなのかー、と歌みみたいに囁きながら、貼り付けたような笑顔で部屋から出て行つた。

私はもう、だめかもしれない……。

第一話 めたいゆめのなかのチルノ（後書き）

「どうやってリグルたちとあわせよう、森の中で妖怪とでも遭遇させようか…と思つていたら、こうなつた。すげー」
うな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9114p/>

東方大妖精

2011年1月9日02時35分発行